

## 農林水産省と環境省の連携による

### 「田んぼの生きもの調査2005」の結果について

#### 1. 調査目的

農業農村整備事業は、土地改良法の改正（2001）を踏まえ、環境との調和に配慮した自然と共生する「田園環境創造型」に転換しています。

「田んぼの生きもの調査」は、上記を踏まえ平成13年度から全国の水田周辺水域（農業水路と一部のため池）の生態系の現状を把握することを目的に行っている生物生息調査です。

#### 2. 調査内容

- ・調査対象生物：魚・カエル
  - ・魚調査：311地区 1,848地点
  - ・カエル調査：304地区 395地点
- カゴ網・タモ網等を使用した調査

#### 3. 参加団体：530団体

- ・地方農政局・北海道開発局・沖縄総合事務局・緑資源機構・計 81団体
  - ・都道府県・市町村・土地改良区及び都道府県土地改良事業団体連合会  
（都道府県水土里ネット）・・・計 296団体
  - ・小学校・こどもエコクラブ・地域住民等・・・計 153団体
- 地方農政局や都道府県等は出先事業（務）所を単位として集計

#### 4. 調査期間

平成17年 6月上旬～10月下旬

#### 5. 調査結果のとりまとめ

環境省との連携{調査手法への助言・提案、自然環境保全基礎調査（緑の国勢調査）との情報交換}を行い、とりまとめを行っています。

## 6. 調査結果の概要

魚調査は、全1,848地点で実施した結果、1,422地点（約77%）で何らかの種が採捕されました。

カエル調査は、全395地点で実施した結果、359地点（約91%）で何らかの種が採捕されました。

採捕された 魚：20科 94種  
カエル： 4科 17種

### (1) 全国的に多く採捕された上位5種

{カッコ内は採捕地点数を示しています。以下も同様。}

#### 【魚】

ドジョウ(473)・タモロコ(239)・モツゴ(221)・ギンブナ(218)・メダカ(195)

#### 【カエル】

ニホンアマガエル(245)・トノサマガエル(119)・ヌマガエル(116)・ツチガエル(54)・トウキョウダルマガエル(51)

### (2) 希少種（環境省レッドリストに挙げられている種）

#### 魚では18種

スナヤツメ(11)・シベリアヤツメ(3)・ヤチウグイ(5)・カワバタモロコ(1)・タナゴ(2)・カゼトゲタナゴ(1)スジシマドジョウ小型種\*(3)・ホトケドジョウ(13)・エゾホトケドジョウ(2)・ギバチ(8)・アカザ(2)・イバラトミヨ雄物型\*\* (2)・エゾトミヨ(4)・メダカ(195)・オヤニラミ(2)・タメトモハゼ(1)・タナゴモドキ(1)・キバラヨシノボリ(2)

\* スジシマドジョウは3種8型に分けられます。この中でスジシマドジョウ小型種は、希少種に指定されています。

\*\* イバラトミヨ雄物型は、イバラトミヨ種群の他種と遺伝的に大きく分化した地域個体群であるため、希少種に指定されています。

#### カエルでは1種

ナゴヤダルマガエル(7)

### (3) 国外外来種(ここでは、国外から移入してきた種を指します。)

#### 魚では12種

タイリクバラタナゴ(119)・カラドジョウ(14)・ニジマス(4)・タウナギ(1)\*・カダヤシ(18)・グッピー(4)・ソードテール(1)・オオクチバス(27)・ブルーギル(24)・カワスズメ(6)・ナイルティラピア(3)・カムルチー(9)

\* タウナギは、沖縄では、その起源が不明あるいは原分布と考えられています。九州以北のものは移入とされています。しかし、記録されている場所でも既往資料により国外外来種として持ちこまれたことが明らかな場所と、資料に乏しく起源が不明な場所があります。そのため、「田んぼの生きもの調査」では沖縄以外の地域のものは全て便宜上「国外外来種」として表記していません。

#### カエルでは2種

オオヒキガエル(3)・ウシガエル(9)

### (4) その他

水田周辺では、コイとドジョウの仲間が多く生息していることが確認されました。国内に生息する淡水魚のリスト<sup>1)</sup>と、これまで5年間の「田んぼの生きもの調査」で確認された種を比較すると、コイ科で70%、ドジョウ科で71%と非常に高い率となっています。

国内在来種以外に国外外来種の分布も明らかになってきました。

オオクチバスやカムルチーなど強い魚食性を示す外来魚は、今年度、全国の20県60地点で確認されており、国内在来種への強い影響が懸念されています。

カラドジョウ<sup>2)</sup>は、昨年度までに確認されていた17県に加え、和歌山県において新たに生息が確認されました。

タウナギ<sup>3)</sup>は、昨年度までに確認された愛知県、徳島県、長崎県、鹿児島県、沖縄県に加え、和歌山県において新たに生息が確認されました。

以上のように「田んぼの生きもの調査」によって生息分布が明らかとなってきましたが、今後も分布域の拡大の有無を監視する必要があります。

1) 環境省自然環境局(平成14年3月)生物多様性調査動物分布調査・淡水魚類

2) 「カラドジョウ」は、これまで魚類学分野ではその存在が知られていましたが、日本における生息実態がわかっていませんでした。

3) 「タウナギ」は、田んぼの畦などに穴を開けるなど営農面への影響も考えられる種として知られています。このため、本年度も昨年度に引き続き、カラドジョウ・タウナギについての見分け方などに注意して調査を実施しました。

## 7. 今後の展開方向等

- (1) 来年度も環境省との連携を図り、生物生息調査を実施します。
- (2) 本調査結果を蓄積・分析することにより、生物保全のためのより良い施設整備のあり方を検討するための基礎資料とします。
- (3) 地域の方々が実施する生態系保全や環境教育などの地域活動などとの連携を進めます。